

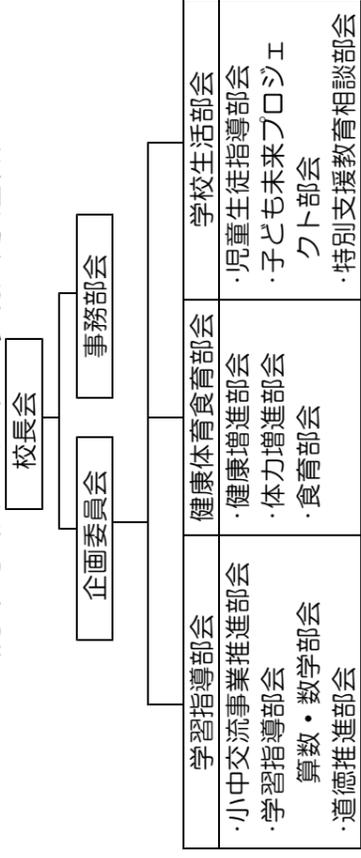
下野市学校教育目標

- 1 自主的に学び、主体的に問題を解決しようとする子どもを育てる。
- 2 豊かな情操と道徳性を備え、礼儀正しい子どもを育てる。
- 3 自他の生命・人権を尊重し、強い意志と健康な身体をもつ子どもを育てる。
- 4 勤労・奉仕の精神を理解し、すすんで社会のためにつくそうとする子どもを育てる。
- 5 郷土の文化と伝統・自然に誇りをもち、自信をもって（国際）社会で活躍できる資質を備えた子どもを育てる。

小中一貫教育推進の方針

- 9年間の学びをつなぎ、確かな学力、健やかな体の育成、豊かな心の育成を保証します。
- 9年間の一貫した児童生徒理解により、子どもたちが安心して学べる場を提供します。
- 郷土への理解を深め、ふるさとを愛する心を育てる教育活動を推進します。
- 「学校運営協議会」の導入により、地域とともにある学校づくりを推進します。

石橋中学校区小中一貫教育組織



児童・生徒の様子

- ・素直で何事にも真面目に取り組んでいる。
- ・基本的な生活習慣が身に付いている。
- ・地域の活動に意欲的に取り組んでいる。

地域の様子

- ・学校教育に協力的であり、学校を支援する組織も活発に活動している。
- ・学区には、農業地区・商業地区・住宅街があり、バランスのよい生活環境である。



あいさつ運動



子ども未来プロジェクト会議



かんぴょうしゅす



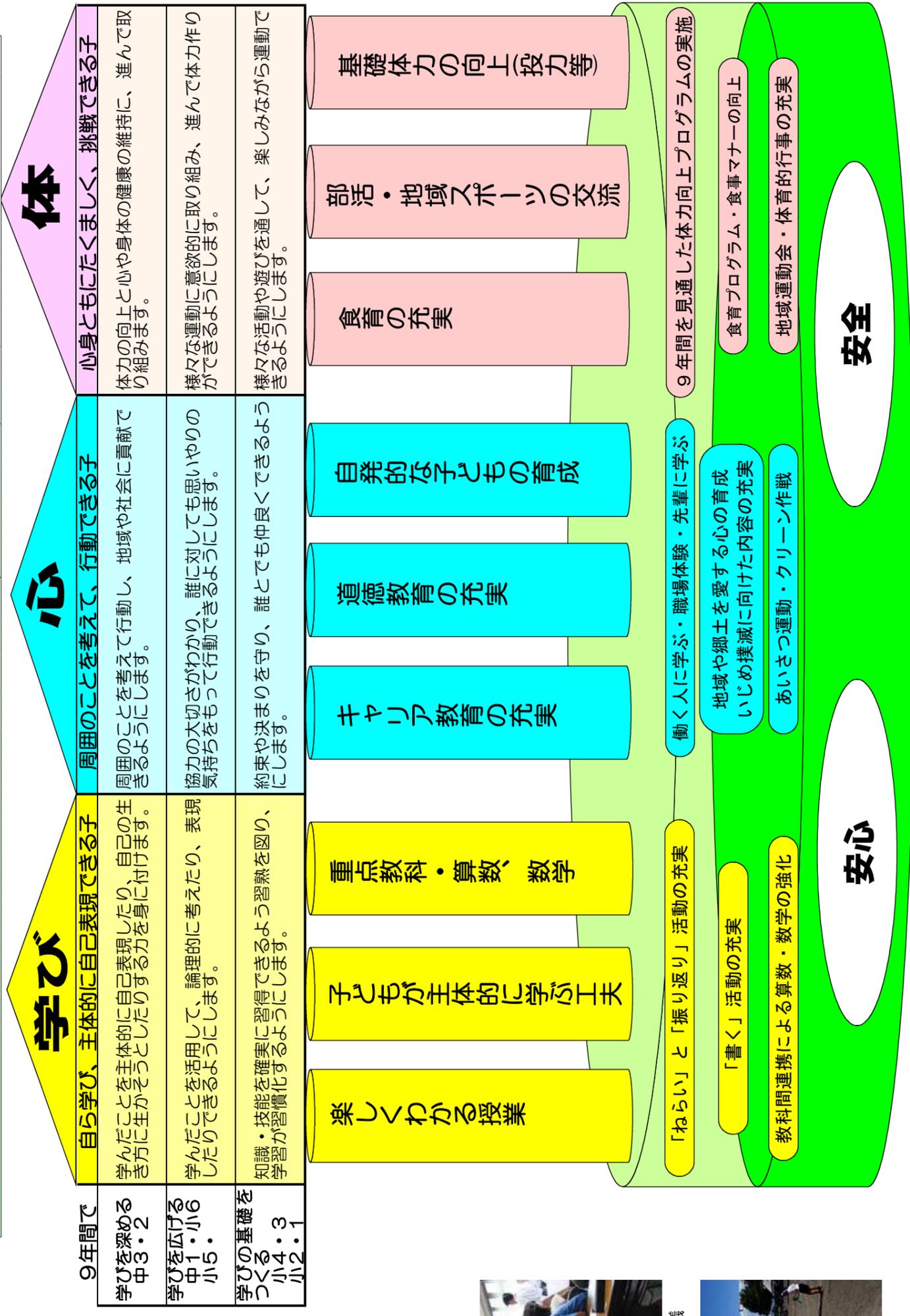
かんぴょうしゅす

《学区各校 在籍児童・生徒数》

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	中1	中2	中3	計
石橋中							214	195	218	627
石橋小	72	68	71	79	81	86				457
古山小	75	92	76	77	85	72				477
細谷小	5	6	9	10	9	7				46
石橋北小	36	30	44	39	36	24				209

H30. 6月現在

地域とつながり社会に貢献できる子



石橋中学校区

【目指す子ども像】

- ◎地域とつながり社会に貢献できる児童生徒の育成重点教科
- 自ら学び、主体的に自己表現できる子
 - 周囲のことを考えて 行動できる子
 - 心身ともにたくましく 挑戦できる子

重点教科

算数・数学

【重点項目】

- ・「めあて」と「振り返り」の充実【児童・生徒一人ひとりの学びの保証】
- ・書く指導の徹底【全教育活動で自分の考えを「書くこと」を通して能動的な学習者を育てる】
- ・地域行事等への参加促進
- ・目標を設定し、体力向上を図る体育指導

石橋中学校区は、児童生徒の実態をもとに、「地域とつながり社会に貢献できる子」とする9年間で目指す子ども像を設定した。そして「学び・心・体」の3つの部会を立ち上げ、さらに9つの分科会で活動してきた。年間5回の研修会では、その都度、各学校の実践を確認しながら、よりよい小中一貫教育を目指して推進してきた。今年度は、今までの活動を小中一貫教育の視点で見直し、組織化して実践した。

各部会の取組

<小中交流事業推進部会>

【児童生徒の実態】

- ・素直で何事にもまじめに取り組む。しかし現状に満足していて、より高みを目指すという気概が少ない。

【部会のねらい】

- ・教員交流の質の向上
- ・現状の把握と指導技術の向上

【部会の取組】

視 点	取組の具体(P・D)	成果	課題
<A> 教育課程の工夫改善	小中一貫の日を位置付ける。	・位置付けることができた。	・周知を続けていく。 ・家庭学習の内容を充実させる。
 教育活動の連続性の確保	重点教科である、「算数・数学」を中心に、相互乗り入れ授業を行う。	・多くの交流ができた。	・連絡調整の方法をはっきりさせる。 ・推進委員がリーダーシップを発揮する。
<C> 教職員間の連続・協働	相互乗り入れ授業の計画 ・参観したい授業や交流したい授業の希望に合わせて、時間単位で交流する。 ・事前に教師や教科のすりあわせを行い、実施は担当教諭同士の打合せで進め、実践する。	・目的がはっきりしてよかった。	・連絡調整の方法をはっきりさせる。 ・推進委員がリーダーシップを発揮する。

<学習部会>

【児童生徒の実態】

- ・小学校…家庭学習の取り組みが低い、学力差がある、論理的な説明が苦手、学習習慣の環境に差がある。
- ・中学校…自主学習ができない、話し合い活動が苦手（学年、学級に差がある）

【部会のねらい】

- ・ねらいと振り返りが的確に行われる授業展開の中で、「書く力」を育てていく。
- ・学習においてつまづきが見られる児童生徒に対し、学習状況を分析し、どのような学習の手立てをしていけばよいか小中の教員の連携を図る。

【部会の取組】

視 点	取組の具体(P・D)	成果	課題
<A> 教育課程の工夫改善	交流授業の活性化	・小中のお互いの様子を知ることができた。 ・今後もお互いの指導内容や方法を理解しながら、自校での指導に生かしていく。 (算数・数学部会) ・中学校の技能系教科の先生による指導は専門性が高くありがたい。	・中学校教員の負担軽減。(出前授業でなくお互いの参観とし、交流できる職員数を増やす考えも。)
 教育活動の連続性の確保	小中合同の授業(出前授業を行う)	・進学前に児童が中学校の雰囲気を経験できた。	・実施方法については検討も。(例えば小中隔年で授業公開とセットにするなど。)
<C> 教職員間の連続・協働	家庭学習の充実(パワーアップノートの周知徹底) 学習調査(とちぎっ子)の分析と小中の共有化	・パワーアップノートを使った自主学習の習慣化を目指した取組を行うことができた。 ・各校で家庭学習強調週間等の期間を設け、実践できた。	・学校間の事情が異なるため、共通して実施できることを絞ってもよい。 ・パワーアップノートの名称や活用方法について。 ・取組内容の小小連携強化
<D> 家庭・地域との連携・協力	学習ボランティアの活動をふやす(プールの補助、ミシンの操作、読み聞かせなど)	・各校の実情に応じて、ボランティアの活用が図れた。	・家庭学習強調週間については、小中の兄弟で日程が異なると不便。小中で実施時期を揃える。 ・家庭学習内容の精選と家庭への協力依頼

<道徳部会>

【児童生徒の実態】

- ・地域行事への参加意識がうすれてきている。 ・「書くこと」の差が大きい。

【部会のねらい】

- ・地域への愛着を持ち、地域に貢献できる児童・生徒の育成。
- ・話し合い活動を通して自分の考えを深め、その考えを「書く」事ができる。

【部会の取組】

視 点	取組の具体(P・D)	成果	課題
 教育活動の 連続性の確保	道徳ノート、ワークシートなどを共有し、授業の中で「書く」活動の重点化を図る。	・全校一斉で同じ形式のノートを使用することで思考が蓄積されていく。	・書いたものを発表し、お互いに考えを深める時間が必要。
<C> 教職員間の 連続・協働	地域教材の開発を継続して行い、共有化を図る。	・「ふるさと・とちぎの心」を活用できている。 ・地域愛に関するものもやれた。	・開発は難しい。
<D> 家庭・地域との 連携・協力	地域の行事への参加意識を高めるために、家庭への啓発を行っていく。	・お祭りやグリムのイルミネーションなど、地域の行事へはよく参加している。	・学年・学校・学級便りでもっと発信していく。(読む気になるものを作る。)

<健康増進部会>

【児童生徒の実態】

- ・生活習慣の乱れによる健康課題が多く見られる。特に視力低下の児童生徒が多い。

【部会のねらい】

- ・小学校で身につけた生活習慣を中学校でも継続できるように、小中で一貫した指導を続ける。
- ・各学校の健康課題について情報共有し、地区での連携を図る。

【部会の取組】

視 点	取組の具体(P・D)	成果	課題
<A> 教育課程の 工夫改善	集会等を活用した保健指導	・集会などを利用して、メディアとの付き合い方を考えさせることができた。	・全体指導の場や時間の確保が難しい。(集会など)
 教育活動の 連続性の確保	ノーメディアデーの実施 放送での呼びかけ	・ノーメディアデーの実施により、児童生徒への意識付けを高めることができた。	・児童生徒への継続的な指導支援が必要である。
<C> 教職員間の 連続・協働	実施計画の作成、教職員への周知	・職員会議等で共通理解を図ることができた。	継続的な啓発が難しく、計画的に指導を行う必要がある。
<D> 家庭・地域との 連携・協力	保健だより、学校だより、学校保健委員会による情報共有、連携	保健だよりで家庭に啓発したことで、保護者との連携を図れた。	保護者の意識が高いとは言えず、認識を強化していきたい。

<体力増進部会>

【児童生徒の実態】

- ・新体力テストの結果において、小学校5年生では全国平均を下回っているが、中学2年生では全国平均を上回る傾向にある。(部活動の推進)
- ・運動する・しない児童生徒の二極化が顕著である。
- ・全国平均と比べて、児童生徒の投力や握力が劣っている。

【部会のねらい】

- ・運動に親しむ習慣を身に付ける。(業間運動や遊具の工夫、教科体育)
- ・運動習慣や技能、体力の2極化に対応し、苦手の児童生徒にも、「運動が楽しい」「運動したい」という関心意欲を育てる。

【部会の取組】

視 点	取組の具体(P・D)	成果	課題
<A> 教育課程の 工夫改善	運動が苦手な児童生徒が運動に親しむための活動案を考え実践する。	・ロングの昼休みでは、運動の不得意な児童生徒も運動に参加できた。 ・児童会、生徒会主催の行事を行い、運動の機会をつくったり、興味関心を高めたりできた。	・2極化解消のための取組を実施。 ・単発にならずに継続させていく。
 教育活動の 連続性の確保	投力や握力を強化するための連続性のある指導。小学生高学年の中学校部活動への参加など、小中の連携方法や場を考える。(6年生との交流を図っている部活動もある。)	・投げ方を知らない児童生徒への指導が必要。 ・具休策の実施(サーキット、ニギニギ握力、帽子のつば投げ、ぶら下がり、的当て等)ができた。	・ボールを投げる機会を意図的に設定していく。 ・部活動との連携を図る。(中) ・研修等により教職員が自信をもって投げ方を指導できるようにする。
<C> 教職員間の 連続・協働	新体力テストの結果分析、工夫・改善したことなどを研修会で情報交換する。	・情報提供ができた。 ・職員への周知が図れた。	・全職員でも共通理解を図れるようにする。 ・結果を指導に生かせるよう改善を図る。
<D> 家庭・地域との 連携・協力	新体力テストの結果および分析を家庭に返し、望ましい運動習慣を形成できるよう呼びかける。	・家庭との連携が図れ、体力向上につながったケースも見られた。 ・児童生徒に、個票(学活等)、体育の時間などで結果と課題を確認させることができた。	・家庭への啓発が不十分である。 ・学校HPや学校だより等でも発信できるとよい。

<食育部会>

【児童生徒の実態】

- ・各小学校、中学校で実態に合わせた指導を行っているが、小中を見通した指導体制はできていない。
- ・市の課題である朝食摂取状況について、「毎日食べる」割合は小学校86.7%、中学校81.2%であり、県平均を下回っている。(平成29年10月調査) また内容についても、おかずがないなどの課題がある。

【部会のねらい】

- ・栄養教諭・学校栄養職員員の配置が確保されているうちに、9年間を見通した指導計画と教材や資料等の共有化や効率化を図り、学級担任や教科担任等が食育の視点を踏まえた指導を行えるようにする。
- ・市の重点課題である朝食の改善について、欠食率を下げ内容の向上につながる指導を行う。

【部会の取組】

視 点	取組の具体(P・D)	成果	課題
<A> 教育課程の 工夫改善	・石橋中学校区食育推進体制の整備 ・実態の把握と指標の設定 ・石橋中学校区食育全体計画と年間指導計画の作成 ・栄養教諭・学校栄養職員と連携した指導の工夫	・各小中学校で推進できた。 ・石橋北小で5年学活朝食についての公開授業・研究会を実施できた。	・各小学校4年または5年の学活で朝食指導を実施し、年間指導計画に位置付ける。
 教育活動の 連続性の確保	・給食時間や各教科・領域における指導内容を設定し、教材研究を進める。	・給食週間に全小中学校で朝食について共通した指導を行うことができた。 ・石中中学区食育だよりを配布し、保護者にも啓発を行った。	・啓発デー等のもち方について、例えば健康や生活習慣、学習等の他部会と共同で行うなどあらかじめ話し合っておく必要がある。
<C> 教職員間の 連続・協働	・各校各学級で、発達段階毎の指標を踏まえた指導を日常的に行う。 ・栄養教諭・学校栄養職員未配置校との連携	・授業だけにとどまらず、行事等の教育活動の様々な場面で朝食についての指導啓発を行っている。	・担任等への啓発を図り、常日頃から朝食についての意識を高める必要がある。
<D> 家庭・地域との 連携・協力	・実践内容や家庭で協力を仰ぎたい部分を「石橋中学区食育だより」にまとめて配布 ・その他、学校だよりや給食だより等で随時情報発信 ・家庭教育学級や学校行事等で啓発	・家庭教育学級の実施や食育だよりの発行を行っている。 ・授業の内容について保護者に対する啓発プリントを配布した。	・他部会と連携して、家庭への呼びかけを強化し学校での取組を伝える。

<児童生徒指導部会>

【児童生徒の実態】

- ・あいさつを課題としている学校が多い。特に来校者や交通指導員さんなど外部の方へのあいさつができていない。各校生活委員などを中心に活動を行っているが、なかなか効果が上がっていない。

【部会のねらい】

- ・気持ちの良いあいさつができる。

【部会の取組】

視 点	取組の具体(P・D)	成果	課題
<A> 教育課程の 工夫改善	・各校であいさつ強調週間を計画、実施する。 ・月ごとの目標を設定し、掲示する。	・委員会を中心として活動を進め、児童生徒の意識が高まった。	・個人差、学年差などがまだあり、引き続き、継続して指導する必要がある。
 教育活動の 連続性の確保	・学級編成資料の改善をする。	・今まで変わらず使用していたが、見直す機会となった。	・今後も改善をしていく。
<C> 教職員間の 連続・協働	・授業などのあいさつの仕方を小中で統一する。 ・あいさつ強調週間の情報交換を行い、自校の取り組みに活かす。 ※立哨指導では小中関係なくあいさつするよう指導する。	・小学校のあいさつの仕方 ※授業等のあいさつ(語先後礼)の形が、中学校でも取り入れ、統一が図られた。	・様々な機会をとらえ、小中間、小小間での情報交換をし、各校の取組を自校に生かすように努める。
<D> 家庭・地域との 連携・協力	・学校だよりなどで家庭への啓発、協力依頼を行う。 ・夏休みにあいさつチェック表を利用し、家庭で評価してもらう。	・学校だより等は、保護者への啓発となり、家庭の協力がより得られるようになってきた。	・児童・生徒の大きな変容は見られなかったため、継続して指導をしていく。

<子ども未来プロジェクト部会>

【児童生徒の実態】

- ・小中で連携を図り、あいさつ運動、クリーン作戦を同一歩調で行うことができています。
- ・中1ギャップをなくすために、中学校説明会で小学校児童の意見を吸い上げ、中学校の生徒会を中心に運営することができた。

【部会のねらい】

- ・中1ギャップをなくし、スムーズに進級ができるよう、小学校と中学校で連携し、学校生活の指導の違いをなくしていく。(あいさつ・靴そろえなど、共通する指導を取り入れていく)
- ・あいさつ運動やクリーン作戦の持ち方を検討する。

【部会の取組】

視 点	取組の具体(P・D)	成果	課題
<A> 教育課程の 工夫改善	・小中一貫の日を年間5回位置付ける ・小中職員交流事業の実施	・小中一貫の日=家庭学習の日、ノーマディアデーとして意識付けられた。	・小中一貫の日の周知を更に進める。ノーマディアデーについても浸透させたい。
 教育活動の 連続性の確保	・小中クリーン作戦やあいさつ運動の実施 ・小中音楽祭への参加 ・夏休み中の意見交換会(子ども未来会議) ・部活動見学(新入生説明会)	・子ども未来会議は、6年生にとってよい機会であった。 ・新入生説明会で中学生の姿にあげられ、中学校でも取り入れ、統一が図られた。	・スカイブ(ネット会議)の活用を広げられるとよい。 ・クリーン作戦の他に何かもう1日できないか考えたい。 ・あいさつ運動を「普通」にしたい。
<C> 教職員間の 連続・協働	・クリーン作戦計画表の作成 ・担当を明確にする	・前年度より小中間で連携し、計画的に行えた。活動もスムーズだった。	・クリーン作戦の活動内容は工夫していきたい。 ・教職員間の引き継ぎのタイミングの設定と時間の確保をする必要がある。
<D> 家庭・地域との 連携・協力	・クリーン作戦で地域・公共の場を小中合同で清掃する ・教育の集いで地域の方々に情報発信する		・元々ある行事の中で、地域ボランティアやPTAと一緒に活動できるように連携・協力を図りたい。

<特別支援・教育相談部会>

【児童生徒の実態】

- ・比較的学校生活・集団生活に適応して生活できている児童生徒が多い。

【部会のねらい】

- ・児童生徒への適切な支援を継続的に行う。特に、小学校から中学校への引継ぎ・伝達を円滑かつ確実に行えるようにする。
- ・特別支援教育に対する教員間の意識の格差をなくしていく。
- ・個別の指導計画の充実を図る。

【部会の取組】

視 点	取組の具体(P・D)	成果	課題
<A> 教育課程の 工夫改善	・小中一貫の日を年間行事に位置付ける。	・年間で位置付けることができた。	
 教育活動の 連続性の確保	・学校説明会の充実 ・特別支援学級入級希望(迷っている児童・保護者の中学校見学、相談の充実)	・各小学校に対し、学校説明会を行うことができた。	・児童によってはまだまだ小中間のステップが大きく、適応が難しい。個別の対応が必要。
<C> 教職員間の 連続・協働	・教員の意識を高める特別支援教育研修(現職教育)の工夫と実践 ・個別の支援計画の工夫・改善および確実な実施 ・小中間での児童生徒指導の伝達・引継ぎ・連携	・各校内での工夫や改善は進められた。	・中学校への情報の引継ぎを丁寧に行うようにしたい。 ・各校の取り組みの情報(特別支援だより・教育相談だより)を共有できるようにしたい。
<D> 家庭・地域との 連携・協力	・保護者の理解を高める啓発活動 ・保護者とのより円滑な連絡・手続きを実現するためのシステムづくり(文書・役割の明確化と統一)	・関係機関との連携が図れた。 ・校内での啓発活動を行えた。	

成果と課題

◎成果

- ・小中統一された「家庭学習強調習慣」などの期間の設定により、児童・生徒・家庭への良い啓発となった。
- ・部会ごとの内容で歩調を合わせた実践ができた。
- ・家庭の意識の向上がアンケートの結果などから見られた。(Noメディアデー)
- ・教職員の意識の向上が見られた。
- ・算数・数学を重点教科にすることで、「繋がり」がわかり、小中のギャップが明確になり、何をすべきかという議論が深まった。
- ・今まで実践してきた活動が小中一貫という流れの中に位置付いた。
- ・キャリア教育の視点で有機的につながった。
- ・小中の教員に良い相互作用が起きた。

●課題

- ・5つの学校の実態も加味しつつ、中身の統一等の精選を図ること。
- ・各学校において分科会での共通理解事項を周知する機会が必要である。
- ・目的を明確にしながら、学校のスリム化を図ること。
- ・学校運営協議会等を活用しながら、生徒児童を取り巻く「地域」を巻き込むこと。
- ・小中の連携。